

キリスト教学Ⅰ及びⅡのカリキュラムのねらいと実践

出村みや子

今回の研修セミナーのテーマは「聖書科教育のねらいと実践」であり、私に与えられた課題は、東北学院大学において必修科目となっているキリスト教学ⅠとⅡについて、キリスト教学担当教員としてその意義と今後の課題について発題し、参加者と意見交換をすることであった。以下に記すのは、当日の発題内容の概要と、講演後の出席者との懇談を通じて与えられた様々なご指摘を踏まえて内容を整理し、まとめたものである。具体的には全学共通シラバスで行われているキリスト教学Ⅰと、それぞれの担当者がテーマを設定して専門的に教えるキリスト教学Ⅱについて、それぞれのカリキュラムのねらいと実践例を紹介しつつ発題する必要があるが、キリスト教学ⅠA,ⅠBは引き続き共通シラバスで授業を行うので、今回のセミナーでは現在議論が行われている「キリスト教学Ⅱ」を中心に私見を述べさせていただく形となった。

1) 大学認証評価におけるキリスト教学Ⅰ,Ⅱの位置付けとポイント

東北学院大学におけるキリスト教学の位置付けと今後の課題については、まず今年度の大学認証評価における以下の記述が参考になる。

「[キリスト教学Ⅰ] (1年次対象) と [キリスト教学Ⅱ] (3年次対象) が必修科目として開講されている。キリスト教学は、神学分野の内容に加え、諸学問の基礎や応用に関わる内容、例えば、思想、文化、倫理などをも反映させることができる科目であるとの認識に基づき、キリスト教学Ⅰにおいては聖書の内容を基礎とした入門的内容の講義を、また、キリスト教学Ⅱにおいては担当者の専門性を生かしつつ、対象学部部の学生にも有益で充実した講義を提供するよう努めている。キリスト教学の遂行状況の点検・評価に関しては、キリスト教学担当者会議がこれを行っている。今年度は、

キリスト教学をさらに開かれた講義科目に改善するために検討を加え、

- a) キリスト教学の目的，講義主題，東北学院の建学理念，国際文化との関連，開講学部の専門性との関連，などをシラバスにおいて提示する
- b) キリスト教学担当者が各クラスで配布する詳細なシラバスを合本にして公開する
- c) 『教科書』や『キリスト教資料集』などを刊行し，キリスト教学の講義内容を公にする
- d) キリスト教学の公開性に関する自己点検を継続する
- e) さらに講義内容を充実させるため，講義主題を明示する複数並行開講の可能性を考慮する、

などの努力項目が提示されている」（以上、大学認証評価における「大学の理念・目的・教育目標とその達成状況」の項目より）。

以上の記述によれば、キリスト教学Ⅰが「聖書の内容を基礎とした入門的内容の講義」であるのに対し、キリスト教学Ⅱにおいては「担当者の専門性を生かしつつ、対象学部の学生にも有益で充実した講義」であることが目指されており、今後キリスト教学担当者には講義内容およびシラバスの充実と公開、関係資料の作成などが求められていると言える。

2) 拡大キリスト教学担当者会議（2009.11.30）の確認事項について

次に Semester 制導入について、キリスト教学Ⅰの講義については既にキリスト教学ⅠA、ⅠB（すべて半期科目）への移行が始まっており、引き続き四単位が必修となっているが、現在のキリスト教学Ⅱについては一部の学部を除き 2013 年度から Semester 制の導入に伴い、カリキュラム上の大きな改訂が予定されている。まず現在の通年四単位必修からキリスト教学ⅡAとⅡBの選択必修となり、少なくとも一科目を履修することになる。つまりキリスト教学の必修単位数は従来の八単位から六単位になるのである。それに伴い、キリスト教学ⅡAとⅡBの講義のテーマも「キリスト教と文化」、「キリスト教と世界」、「キリスト教と諸宗教」、「キリスト教と人生論」に区分され、多くの学生がキリスト教学Ⅱの科目を自由に選択できることになる。

学生の希望を尊重しつつも、クラスの規模を均等にして担当教員の負担が偏らない

ようにすることが可能かどうかは実際にやってみなければわからず、開始当初はかなりの混乱は避けられないと思うが、この試みがうまく行けば、キリスト教学の学びに興味を持って引き続き複数のクラスを履修する上級生も出てくるだろう。実際に私は横浜のキリスト教主義大学で、必修単位を超えてキリスト教学科目を履修する学生を何人も教えた経験があり、また自分自身も大学時代に次第にキリスト教に興味を持ち、キリスト教専門科目を複数履修したが、当時の学びが現在まで非常に役立っている。キリスト教学Ⅱを、履修しなければならない科目から、学生が自由に履修できる魅力的な科目へと転換させることがどのように可能となるのか、早急に検討する必要があると思われる。

まず担当者間で確認する必要があると思われるのは、この授業がキリスト教学の枠内で行われるということである。東北学院大学はこれまでもその立場を堅持してきたが、本学の建学の精神である聖書に基づくキリスト教の学びを、倫理学や比較宗教学などの他の諸学に還元してしまうことを避けねばならないし、ましてやその学問性を喪失して単なる人生論や文化論を講じることは、大学の3年生を対象としたカリキュラムとしてはふさわしくないであろう。

さらに今回これまでのキリスト教学Ⅱのシラバスを見る限り、ⅠとⅡのそれぞれの授業の課題の相違を明確に意識した授業は必ずしも多くはないことに気づかされた。高校時代に聖書や教理について学んだTG推薦学生については今年度から特別クラスを設け、一般クラスと特別クラスのいずれかを選択できるようになったことを考えると、上級クラスについてはシラバス上での記述に配慮が必要であろう。つまり上級生は一年次に履修する「キリスト教学Ⅰ」においてすでに聖書とキリスト教の歴史および教えの内容を履修しているので、キリスト教学Ⅱはそれを前提しつつも何らかの発展させた内容を扱うことを学生にはっきり明示することが望ましいのではないだろうか。

この点については佐藤司郎先生が『東北学院大学 教育研究所報告集』第9集(2009年3月)に寄稿された研究報告「教養教育科目としての「キリスト教学」の意味と課題」において用いた「語調を変えて」(ガラテア書4,20)というパウロの言葉に注目した記述が有益であると思われる。

「自己変革の課題は、むしろ「キリスト教学」にだけあるわけではない。しかし「キリスト教学」にはただ制度面、あるいは教育技術面についてそれをすればよいという

わけにはいかないものがある。なるほど教会ではなく教室においてであっても、聖書が説かれ、キリスト教について語られるからには、いつの時代も必要なら「語調を変えて」（ガラテア書 4,20）語る努力をおしんではならないということがある。なぜそうかと言えば、その理由を社会環境、とくに学生および学生をめぐる教育環境の激変だけに求めることはできない。そうではなくてそうした変化を通じてじつは神の語りの自明性が問われているということなのである」（37頁）。

佐藤論文ではディートリヒ・ポンフェッファーによる聖書の「非宗教的解釈」に言及された後に、それは神を語ることの放棄を意味せず、「かえってそれは神を意味深く語るチャンスでもあるということである」と論じられている。つまり「語調を変える」ことは聞き手の問いの掘り下げのことにほかならない」のであり、キリスト教学が魅力あるものでありつづけるために担当者は「意味深く語る」ことに努めねばならないのである（38頁）。

今回の改訂が、学生にとってキリスト教学Ⅱが魅力ある科目になるきっかけとなればよいと思う。

3) 今年度の「キリスト教学Ⅱ」のシラバスに見る担当者の工夫

今回の発題では、キリスト教学担当者のシラバスを紹介し、特に何人かの若手教員のシラバス上の工夫例を紹介させていただいた。それは学生により近い立場から、学生が興味を抱きそうな切り口でシラバスが構成されており、いずれも学生にとって魅力ある授業にしようとの意欲が認められるからである。新たな試みには異論もあると思われるが、本学の建学の精神を十分理解し、キリスト教学Ⅰの学びを前提とした授業であれば問題ないのではないかと思う。

次に私自身の授業シラバスを紹介した。特に目新しさもなく、シラバスに特別な工夫が見られる訳でもないが、「語調を変えて」キリスト教学Ⅱを講じる一つの試みとみなしていただければ幸いである。

現在は通年科目となっているキリスト教学Ⅱの講義において、私は「キリスト教の人間観」をテーマに、前期は死生観、後期はジェンダーの問題を中心に講義を行っている。それはキリスト教信仰の中でも中核的意義を持つ復活の問題とクリスマスの処女降誕の問題が初心者にとっては理解が困難であり、私自身の学生時代を振り返っ

てみても、これらの問題については様々な角度からじっくり時間をかけて学ぶ必要があると思われるからである。特に前期は春に迎えるイースターの意味を深めるために聖書の復活理解および死生観について様々な角度から深めることに焦点を当て、後期はクリスマスに向けて降誕物語とキリスト論の関係や、教会史におけるマリア理解の変遷に焦点を当ててシラバスを構成している。

授業では毎回レジュメ資料を配布して重要ポイントを指示すると共に参考文献を記載し、画像資料も活用している。最初にキリスト教学Ⅰの簡単な復習を行うと共に、キリスト教信仰の特徴を明らかにし、他宗教への理解を深めるために比較宗教学的方法を導入している。さらに現代的観点を導入すると共に（遠藤周作『深い河』、映画「おくりびと」、その時々の特ピック）、プロテスタント、カトリック校出身者の両方に配慮し、互いの理解を深めあうことをも目指している。また学生の感想を紹介すると共に、学生の疑問・質問に答えつつ、学生の疑問の解消に努めている。

講義を通じて聖書信仰の核心に触れることにより、聖書が理解し易くなった、自分の問題として死生観やジェンダーの問題を捉えることができるようになったとの学生の感想も毎年少なくない。最近ではキリスト教の死生観について自分の人生観の形式のために積極的に学ぶだけでなく、将来の職業選択のひとつとして葬祭関係に興味を持つ学生も出てきている。「語調を変えて」語ることによって、キリスト教の学びが決して難しいものではなく、人生にとって有益で魅力ある学問であることを伝えると共に、多様な学生の人生観の形成に何らかの寄与することができればと願っている。